

2021年8月1日  
宮崎中部教会主日礼拝  
牧師 乾元美

エレミヤ書 17 : 9～10

ルカによる福音書 16 : 14～18

「心をご存じの神」

<正しさへの報い？>

今日の聖書箇所は、「金に執着するファリサイ派の人々が、この一部始終を聞いて、イエスをあざ笑った」という場面から始まります。

ちょっとドキッとさせる言葉が並んでいます。まず「金に執着するファリサイ派の人々」。「金に執着する」とあるのは、「金を愛している」という言葉です。またファリサイ派とは、ユダヤ人の中でも特に、神さまの御言葉である「律法」に書かれたことを、厳格に守っていた人々です。このファリサイ派の中でも、特に金を愛していた人たち。

それらの人々が、「この一部始終を聞いて、イエスをあざ笑った」とあります。「この一部始終を聞いて」とは、前回の 16 : 1～13 でイエスさまがお語りになった、「不正な管理人」のたとえのことです。その最後では、このように言われていました。

「あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」

富。これはマモン、という言葉で「頼りになるもの」という意味です。この世の富。わたしたちが生きるために必要で、頼りになるものです。

それは、すべて神さまから与えられたものです。ですから、わたしたちは神さまが喜ばれることのために、与えられた富を使います。わたしたちの主人は神さまです。また、富も含めて、この世のすべては、神さまのものです。わたしたちは、それを委ねられ、預かっているに過ぎません。

でも、そこを見失ってしまうと、わたしたちは、富にこそ力があるのだと思い込みます。富があれば、何でも手に入る。将来の保証が得られる。安心も買える。人の心も動かせる。…そうして、いつの間にか富が絶対的な存在となり、富の奴隷となってしまう。富を求めて、富を主人にして、富に仕える者となってしまうのです。

だからイエスさまは、神さまと富とに仕えることはできない。ただ神さまだけが主人なのであり、ただ神さまにのみ忠実でありなさい。そう教えられたのです。

しかし、「金を愛するファリサイ派の人々」は、それに同意できませんでした。

彼らは、神さまと富とは深く結びついていて、切り離す必要はない、と考えていました。彼らにとって、富、豊かさ、というのは、神さまの祝福のしるしです。その祝福を神さまからいただけるのは、神の民に与えられた「律法」に従っている、正しい者だと考えました。

ファリサイ派は、自分たちこそ、律法を最も厳格に守っている、という自負がありました。

当然、それは人一倍、大変な努力が必要なことだったでしょう。またその律法に従う生活を教える立場でもありましたから、人々から尊敬もされており、地位も名誉もありました。

そんな中で、特に「金を愛するファリサイ派の人々」は、自分たちが律法に従っている、その正しさへの報いとして、神さまの祝福があるのであり、そのしるしとして豊かな富が与えられるのだ、と考えていたのです。

一方で、病や貧しさなど、困難な境遇の中にある者は、どこかで神さまに背いたから、その報いを受けているに違いない、と考えられていました。

さらに、ユダヤ人以外の、外国の異邦人なんかは、律法を守るどころか、律法をそもそも知らないで、守りようがありません。そんな人々は、最初から救いから落ちてしまっていると考えられ、汚れた者として避けられていました。

しかし、そうであるならば、結局富は、ただ「神さまから与えられた恵み」というのではなく、「祝福を得るに足る、自分の正しさの成果だ」ということになります。

それは、これまでイエスさまが教えて下さったことと、全く違う内容です。

そして、彼らはそもそも本当に、神さまに祝福されるような、「正しい」歩みが出来ているのでしょうか。

#### <心をご存じの神>

イエスさまは、その点を見抜いておられました。15節にはこうあります。「そこで、イエスは言われた。『あなたたちは人に自分の正しさを見せびらかすが、神はあなたたちの心をご存じである。人に尊ばれるものは、神には忌み嫌われるものだ。』」

彼らが主張していたのは、「律法に従っている」という自分の正しさです。

律法とは、神さまに救われた民が、神さまに従って歩んでいくために与えられた掟であり、神さまの御言葉そのものです。厳格に守ること、従うことは、もちろん大切です。

しかし、イエスさまは、「あなたたちは人に自分の正しさを見せびらかすが、神はあなたたちの心をご存じである」と言われました。

「自分の正しさを見せびらかす」というのは、厳密に訳すと「自分を正当化している」ということです。

金を愛するファリサイ派の人々は、自分が律法を守っている正しい者なんだということを、人々に対して見せつけようとしている。律法に対する自分の正しさを、人に向かって主張している。だからこそ、彼らは自分の正しさを守るために、イエスさまをあざ笑って、あんな意見はおかしいとバカにして、他の人々に自分たちの正しさを示そうとするのです。

しかし、神はあなたたちの心をご存じである。本当に、心の底から神さまを愛し、律法が示している神さまの思いを深く読み取って、心から従っているかどうかを、神さまはちゃん

とご存じだ、とイエスさまは言われました。

「律法を正しく守る」というのは、字面通りに律法を守ることではありません。

神さまが求めておられる「律法を正しく守る」とは、神さまが語られた律法を通して、そこに示されている神さまの御心をしっかりと受け止めて、神さまに喜ばれる道を歩んでいくことです。

神さまは、表面ではなく、人の心を見ておられます。人は、表面の正しさと満足し、喜びます。しかし神さまは、表面的、形式的に正しいことではなく、その人の心が本当に神さまに向かい、心から神さまとの交わり生きているかを、見つめておられるのです。

### <神の国の福音>

そこでイエスさまは、次のように語り始められました。16 節「律法と預言者は、ヨハネの時までである。それ以来、神の国の福音が告げ知らされ、だれもが力づくでそこに入ろうとしている。」

「律法と預言者」、つまり、旧約聖書の時代の神の民イスラエルに与えられた、神さまの御言葉です。

かつて旧約聖書の時代、世のすべての人々を救うご計画のために、まず神さまは、イスラエルの民を選ばれました。神さまはこの民を救われ、導かれ、律法をお与えになり、預言者を通して御言葉を語られました。それは彼らが、神さまの民として歩み、その彼らを通して、神さまのご計画を実現するためです。

そして、それは、ヨハネの時までである。つまり、洗礼者ヨハネで、その時代は終わった、というのです。ヨハネは、来たるべき救い主、イエスさまを指し示した預言者です。

そして、イエスさまが来られた。「それ以来、神の国の福音が告げ知らされ、だれもが力づくでそこに入ろうとしている」と言います。

今や、その御言葉、そのご計画が実現し、救い主イエスさまが来られたのです。

イエスさまは、神の御子であり、すべての人を救うために遣わされた救い主です。神の国、神さまのご支配を実現するお方です。この方が来られて、決定的に人類の歴史は転換点を迎えたのです。

そのことによって、もはや、律法を持たない異邦人にも、どのような身分の人にも、イエスさまによって、世界のすべての人に、「神の国の福音が告げ知らされ」ます。すべての人が、神さまのご支配、救いの知らせを聞くことが出来ます。そして、すべての人が、イエスさまの罪の贖いの御業によって、神さまの救いを受け取ることが出来るのです。

それが、「神の国の福音が告げ知らされ、だれもが力づくでそこに入ろうとしている」という言葉で表されています。ちょっと変わった言い回しですが、「だれもが」、つまり、ユダヤ人も、罪人も、徴税人も、異邦人も、だれもが、神の国に力づくで入ろうとしている。す

べての者が、そこに殺到し、突入し、押し入っている、というのです。

しかし、神の国に入るのは、人間の力によってではありません。神さまの力によってです。それで、ある学者の人はここを、神の国に「だれもが激しく招かれている」と訳しました。もう力づくで押し入ると見えるほどに、神さまの圧倒的な力が、人々を神の国へ入れようと働いているのだ。激しく人々を捕らえ、神の国に招いているのだ、ということです。

ルカ福音書の 14：23 で、天の国の大宴会のたとえがありました。そこで、宴会を開いた主人は「通りや小道に出て行き、無理にでも人々を連れて来て、この家をいっぱいにしてくれ」と語っていました。神さまの救いの中へ、神さまのご支配の中へ、神さまの喜びの食卓へ、神さまは無理にでも人々をここへ連れて来たい、この喜びの食卓の席をいっぱいになりたい。そう心から願っておられるのです。

この、神さまの、わたしたちを救いへと招いて下さる熱心さ。激しさ。それが「力づく」という言葉に表されているのです。

思えば、その激しさは、イエスさまのご生涯にこそ現わされているように思います。

世界のすべての罪人を、神さまの御許に立ち帰らせるために、まずイエスさまが、天から降って、この世に突入して来られた。そして、人の罪のために十字架に架けられて死なれ、しかし、罪と死の力を打ち破って復活し、わたしたちに、罪の赦しと永遠の命を与えて下さった。まさに力づくのようなやり方で、激しさで、わたしたちを救うために、命を懸けて、それをやりのけてくださった。

こんな神さまの愛の激しさで、熱心さで、わたしたちは、神の国へと招かれているのです。

ですからもはや、ファリサイ派の人々のように、自分こそ救いにふさわしい者だと主張し、律法によって自分の正しさをアピールすることには、意味がありません。

イエスさまが来られた今や、律法を知らない者でも、世界中のどこの、いつの時代の人々でも、神さまの救いへの招きを受けることが出来ると、はっきり示されたからです。だれもが、正しくないにも関わらず、イエスさまの罪の贖いによって、救われるからです。

ただ、イエスさまに寄り頼む信仰によって救われる、ということが、明らかにされたからです。

<律法はなくなるらない>

しかし、そこで彼らから出るであろう疑問がこちらです。

「では、もう神の民に与えられた律法は、いらなくなったのか。」

それにイエスさまはもう最初から答えておられます。17 節「しかし、律法の文字の一言がなくなるよりは、天地の消えうせる方が易しい」。

つまり、世の終わりまで、律法は意味を持ち続ける。新しい時代になっても、神さまの御言葉であり、御心を教える「律法」は揺るがない、ということです。

ファリサイ派の人々は、律法を、自分の正しさを見せびらかしたり、正当化したり、自分が救いにふさわしい者だと主張するためのものにしてしまっていました。

しかし、イエスさまが来られた今や、それは全く通用しなくなりました。そんなアピールは意味がないし、不必要です。

だからこそ律法は、本来の役割を明確にされます。それは、救われた者が、神さまの御心を知り、それに従って生きることを導くものとして、用いられるということです。

その例として、イエスさまは 18 節の事をお語りになりました。

「妻を離縁して他の女を妻にする者はだれでも、姦通の罪を犯すことになる。離縁された女を妻にする者も姦通の罪を犯すことになる。」

これは、ファリサイ派の人々が、自分を正当化するために律法を自分勝手に解釈していたことを指摘すると共に、本来はこのように用いられるべきだ、ということをお教えられるものです。

ここで「離縁」のことが取り上げられていますが、まず律法では、申命記 24:1 にこうあります。「人が妻をめとり、その夫となつてから、妻に何か恥ずべきことを見だし、気に入らなくなったときは、離縁状を書いて彼女の手渡し、家を去らせる。」つまり、律法でも離縁は認められています。

しかし、この妻の「何か恥ずべきこと」とはどういうことか。また「気に入らなくなったとき」とはどういうときか。それをファリサイ派の人々は、どういう状況が当てはまるか、当てはまらないか、ということをお議論し、解釈していました。

そうすると、単に、本当にただ「気に入らない」というだけで、「妻のこういう態度は、律法の『気に入らないこと』に当てはまる。だから、律法に照らして、合法的に離縁できるのだ」と言って、妻を簡単に離縁する、ということが起きたのです。

つまり律法を、自分の勝手な都合を正当化する理由として、利用していたのです。

一方で、イエスさまが 18 節で語られたことは、この申命記の律法に書かれていることよりも、もっと厳しいことです。「離縁して他の女を妻にする者はだれでも、姦通の罪を犯すことになる。離縁された女を妻にする者も姦通の罪を犯すことになる。」

律法を字面通りに読むならば、離縁は姦通の罪には当たりません。しかし、イエスさまはそれほど厳しいことなのだとお言われた。つまりイエスさまは、離縁の掟は、簡単に、積極的に持ち出すべきものではない、ということをお言われたのです。それは人間の罪のゆえに、どうしてもそうしなければ、互いを傷つけることしか出来ない、というときに、初めて検討されるべきものです。

本来、神さまの御前で結婚をした者は、「二人はもはや別々ではなく、一体である。従つて神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない」という、この御心にまず立つべきなのです。神さまの祝福のもとで、二人が一つになって歩むことこそ、神さまが第一に求めておられることだからです。

「律法」の根底にある、神さまが求めておられる御心に、まず立とうとすること。神さまが望んでおられることを求めつつ、心から神さまに忠実に従っていくこと。

それこそ、律法が教え、求めていることであり、救いの恵みを与えられた者が持つべき姿勢なのです。

そうであるならば、ファリサイ派の人々は、これまで本当に、律法に正しく従ってきたと言えるでしょうか。むしろ、律法を通して神さまの本当の御心を知ろうとするならば、自分たちもまた、神さまの御心に中々従うことが出来ない罪人であることに、気付くはずではないでしょうか。

それなのに、彼らは神さまの御心を求めず、自分の都合に合わせて、これはこういう理由で合法だと言って、自分を正当化するために律法を持ち出す。そうして、自分は律法に適って正しいことをしているのだ。律法に従っているから、救われるにふさわしい者なのだ、と主張する。そんな、神さまを愛するよりも、金を愛するファリサイ派の人々の心を、イエスさまは批判なさったのです。

<神の国に生きる者として>

今や、新しい時代がイエスさまによって到来しています。神の国、神のご支配が実現し、神さまがそこにすべての者を、激しく、力強く招いて下さっています。

招かれるのは、わたしたちの正しさのゆえでは一切ありません。誰一人、神さまの御前に正しさを主張できる者などいないのです。

神さまの招きは、ただ神さまがわたしたちを愛し、憐れんで下さったから。それだけの理由です。ここに、わたしたちの正しさが出る幕など、一ミリもないのです。

ですから、ファリサイ派の人々も、そしてわたしたちも、自分が正しいか、正しくないか、などということを主張する必要はないし、人々に認めさせることもないし、そんなことを言っている場合ではありません。

もう目の前にイエスさまがおられる今、わたしたちは、自分の罪を認め、無力さを認め、このイエスさまにしがみつくしかないのです。イエスさまによってしか、神さまの御許に帰ることは出来ないのです。

しかも、だれもが力づくで神の国に入ろうとしているかに見えるほどに、神さまの方から、わたしたちを積極的に招いて下さっている。強制的に連れてくるかのように、激しく招いて下さっている。迷い出た一匹の羊をどこまでも探し求めるように、わたしたちを捜し求め、見つけ出し、ご自分の御許に、神さまのご支配のもとに、連れ帰ろうとして下さるのです。

わたしたちは、告げられた神の国の福音を、感謝して受け入れることしか出来ません。

神さまから離れ、迷い出て、滅びに向かっていたところを、イエスさまに見つけ出されて、その肩に担がれて、神さまの御許に帰ってくる。小道に座りこみ、弱り、横たわっていたと

ころを、起こされ、立たされ、神さまの喜びの食卓に無理やりのように連れて来られる。  
そして、神さまはわたしたちを迎えて、あなたがいて嬉しい、と言って喜んで下さる。  
わたしたちは、この神さまの恵みを、ひたすら受けることしか出来ないのです。

しかし、そうであるならば、わたしたちは、せめてこれから、救われた者として。正しくないのに、イエスさまの命と引き換えにしてまで、罪を赦していただいた者として。本当に神さまが求めておられる正しいこと、神さまがわたしたちに願っておられること、その御心を知ろうとし、少しでも神さまの恵みにお応えする者になりたいのです。

救いのために、正しさを求めるのではありません。正しくないのに救われた、その感謝の思いによって、神さまの正しさに従うことを求めていくのです。

神さまがわたしたちの心をご覧になった時に、喜んでいただける者になりたいのです。

神さまの求めておられる正しさとは、規則正しい生活とか、品行方正とか、まじめなこと、などではありません。神さまを愛することです。小さなことにも忠実に、神さまを見つめて、神さまに向かって歩むことです。

そしてそれは、わたしたちに神さまが与えて下さった隣人と、どういう交わりを築いていくか、ということにも関わりますし、与えられた富をどのように用いるか、ということにも繋がっていくでしょう。

さらに、そうして神さまとの良い交わりを築いていくために必要なもの、賜物をも、神さまはわたしたちに豊かに与えて下さり、それをわたしたちが、聖霊の導きのもとで、神さまの愛にお応えして、喜んで用いることを願っておられるのです。

ですから、これまで律法によって示されて来た、神さまの御心を求めて生きる神の民の歩みは、新しい神の民の時代になっても、これからも、ずっと続いていくのです。

神さまは、わたしたちの心をご存じです。神さまは、愛の眼差しで、憐れみの眼差しで、期待をもって、忍耐をもって、わたしたちを見つめて下さっています。

この神さまの思いにお応えすることが出来ますように。わたしたちの心が、いつも神さまを求めて、神さまに向かって、神さまに喜ばれるものでありますように。

## 【お祈り】

天の父なる神さま

あなたがわたしたちに、イエスさまをお与え下さり、神の国の福音を告げ知らせて下さり、激しく御国へと招いて下さることを感謝いたします。

わたしたちは、あなたの御前に、何の正しさを申し上げることも出来ません。ただただ、罪を認め、無力さを認め、あなたの救いを受け取るばかりです。どうか、あなたの激しさで、強い御力によって、わたしたちを捕らえ、導き、御許に留まらせて下さい。

あなたが招いて下さる食卓に、座ることが出来る恵みを感謝いたします。この後にあずかる聖餐も、その食卓の先取りであり、わたしたちが確かに招かれていることのしるしです。悔い改めと感謝をもって与らせて下さい。そして、まだ洗礼を受けていない者も、あなたのお招きに感謝してお応えすることが出来ますように。

また、恵みを受けたわたしたちが、神さまの御心を深く知り、心から忠実に従う者となることが出来ますように。あなたがわたしたちの心をご覧になって、喜んで下さる者となることが出来ますように、聖霊によって導いて下さい。

このお祈りをイエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン